

紀 要

第 27 号

2014. 3

公益財団法人滋賀県文化財保護協会

鈴鹿山地を取り巻く縄文時代初頭の人の動き

—相谷熊原遺跡の出土石器から—

重田 勉

1. はじめに

縄文時代草創期の遺跡数は、東日本の方が圧倒的に多く、西日本の縄文時代草創期の研究は、資料が少ないこともあって遅れていると言わざるを得ない。東近江市相谷熊原遺跡の発見は、西日本の縄文草創期研究に重要な資料を与える成果であった。8m級の竪穴建物群と注目すべき無文土器群、石鏃主体の組成の石器群と、多くの重要資料をもつ遺跡である(松室・重田2014)。

本稿では出土石器群の石材や石器組成を用いて、当該期の周辺遺跡との関係を想定し、鈴鹿山地を取り巻く縄文時代初頭の人の動きに接近したい。

2. 石材の割合から見た集団性

相谷熊原遺跡の剥片石器の主な石材は、チャート・下呂石・サヌカイトである。その他珪質粘板岩などもあるがごく少量であり、これら3種の石材を計画的に用いたようである⁽¹⁾。

各竪穴建物の剥片石器の石材の割合は以下のとおりである。チャートには玉髄も含まれる。

○竪穴建物D1-086

- ・点数と重量 チャート121点(385.3g)
 下呂石23点(76.0g)
 サヌカイト 1点(1g)
- ・点数と重量の割合 チャート83.4% (83.3%)
 下呂石15.9% (16.4%)
 サヌカイト0.7% (0.2%)

○竪穴建物E2-006

- ・点数と重量 チャート207点(871.1g)
 下呂石145点(366.7g)
 サヌカイト5点(11.1g)
- ・点数と重量の割合 チャート58.0% (69.7%)
 下呂石40.6% (29.4%)
 サヌカイト1.4% (0.9%)

○竪穴建物E3-001

- ・点数と重量 チャート160点(522.8g)
 下呂石125点(247.3g)
 サヌカイト 36点(90.7g)
- ・点数と重量の割合 チャート49.8% (60.7%)
 下呂石38.9% (28.7%)
 サヌカイト11.2% (10.5%)

○竪穴建物E4-001

- ・点数と重量 チャート193点(747.9g)
 下呂石4点(2.3g)
 サヌカイト2点(94.4g)
- ・点数と重量の割合 チャート 97.0% (88.6%)
 下呂石2.0% (0.3%)
 サヌカイト1.0% (11.2%)

○竪穴建物E4-008

- ・点数と重量 チャート138点(673.5g)
 下呂石7点(14.6g)
 サヌカイト13点(36.5g)
- ・点数と重量の割合 チャート87.3% (92.9%)
 下呂石4.4% (2.0%)
 サヌカイト8.2% (5.0%)

- 合計 チャート 819点(3200.6g) 77.3% (77.3%)
 下呂石 304点(706.9g) 25.8% (17.1%)
 サヌカイト 57点(233.7g) 4.8% (5.6%)

上記の内容の重量の割合に注目すると、チャートが60～70%程度を占め、下呂石が30%程度、サヌカイトが10%程度のグループと、チャートが90%程度を占め、僅かな下呂石(0.3～2.0%程度)と僅かなサヌカイト(5～11%程度)を含むグループとに分かれる(図1)。前者のグループに該当するのは竪穴建物E2-006と竪穴建物E3-001であり、後者のグループに該当するのは竪穴建物E4-001と竪穴建物E4-008である。竪穴建物D1-086はどちらのグループにも該当しないが、下呂石とサヌカイトの重量の割合は前者のグループに近いので、前者のグループに含めて考えている。以下、前者のグループをグループ①とし、後者のグループをグループ②と記すことにする。

5棟の竪穴建物が2つのグループに分かれるという分析結果は、出土土器の分析でも同様で、グループ①の竪穴建物とグループ②の竪穴建物との間に時期差がある可能性が考えられている。また、出土した竪穴建物群は、埋土の堆積状況にみえる掘り直しの痕跡や、床面に残された多数の小穴群の状況などから、断続的に使用され続け床面が複数存在すると思われるに至った。石材獲得地間をある規則性のもと、回帰的に遊動していた痕跡と考えたのである(松室・重田2014)。

3. 遊動生活と石材の消費と補充

上記の石材量の割合の差は何を示しているのか。回帰的遊動を繰り返していたならば、ある獲得地の居住地を旅立

つとき、次の居住地および途中の一時居住地等で消費する石材量は経験的に心得ており、常に一定量保持されているはずである。遺跡内に残される石器の量は使用済みの量であり、これに持ち出された量が必要石材量である。もしも、保持量がほぼ一定していたならば、消費量も地点によって大きく変化することはなく、次の石材獲得地において遺跡内に残される石材量の割合は、石材は違うけれども先の獲得地と似かよった割合になるだろう。

従って、グループ①の石材量の割合は下呂石獲得地に行けば割合が逆転する。相谷熊原遺跡ではチャートが60～70%、下呂石30%、サヌカイト10%の石材量の割合だが、サヌカイト獲得地ではチャートが30%、下呂石10%、サヌカイト60～70%の割合となり、下呂石獲得地ではチャート10%、下呂石60～70%、サヌカイト30%の割合となるだろう。

グループ②の石材量の割合は、相谷熊原遺跡ではチャート90%、下呂石0.3～2.0%、サヌカイト5～11%の石材量の割合だが、サヌカイト獲得地ではチャート5～10%、サヌカイト90%の割合となり、下呂石は限りなく0%に近くなってしまふ。グループ②が相谷熊原遺跡においては下呂石消費量が少ないのは、獲得量が少ないか持ち出し量が多いかによるが、チャートを十分に補給できるので下呂石を多量に持ち出すとは考え難い。従ってグループ②の集団は、下呂石の保持量が少ない集団と考えられる。チャートの割合が圧倒的に多いことから、チャート獲得地間を遊動し、交換等によって下呂石とサヌカイトを獲得したのかもしれない。

ところで、縄文時代草創期の居住形態は、草創期前半の隆起線文系土器群の段階と後続する爪形文系土器群および多縄文系土器群の段階では大きく異なるといわれる(藤山2009)。隆起線文系土器群の段階では半径5km圏内を行動範囲とするのに対し、爪形文系土器群以降の段階では、数十kmの間を回帰的に遊動するようになる。この居住形態の変化の根拠となるのが石材量の割合である。狭い範囲を行動範囲とする隆起線文系土器群の段階では、在地石材を盛んに用いるが、爪形文系土器群以降の段階では遠隔地の石材を積極的に用いとされる(栗島2010)。典型例が長野県お宮の森裏遺跡と同県栃原岩陰遺跡である。いずれも在地石材よりも搬入石材の黒曜石が多量に用いられる。お宮の森裏遺跡は、黒曜石原産地の和田峠から現主要道経由で80km、栃原岩陰遺跡は現主要道経由で65kmある。

相谷熊原遺跡は、石器組成や年代測定結果から爪形文系土器群以降の時期と考えられるが、石材量の割合は隆起線文系土器群段階と爪形文系土器群段階の中間的な割合である。次の段階の居住形態への移行期か、あるいは東日本とは異なる居住形態が採用されていたのか、今後の資料の増加を待って検討する必要があるだろう。

4. 石器組成からみた集団性

石材量の割合から、竪穴建物群は2つのグループに分かれることは明らかになった。竪穴建物が大きく深いグループ①は、石鏃は多く(1棟に製品で13点程度)、スクレイパーは4点ある。竪穴建物は小さく浅いグループ②は、石鏃が少なく(1棟に製品で4～7点)、スクレイパーは1点から2点で、大型スクレイパーを含む。

グループ①・②の石鏃とスクレイパーの数量は以下のとおりである。なお、石鏃の数量は未製品を除いた数量である(図2)。

○グループ①の石鏃とスクレイパー

- ・竪穴建物D1-086
石鏃 3点、スクレイパー 1点
- ・竪穴建物E2-006
石鏃13点、スクレイパー 4点
- ・竪穴建物E3-001
石鏃13点、スクレイパー 4点

○グループ②の石鏃の製品と未製品

- ・竪穴建物E4-001
石鏃4点、スクレイパー 1点
- ・竪穴建物E4-008
石鏃7点、スクレイパー 2点

石鏃とスクレイパーは同時に使用するものではないが、グループ①とグループ②でスクレイパーの点数がまとまりを見せるのは見逃せない。遺構内に残された製品の石鏃点数とスクレイパー点数には何らかの関連性があると思われる、製品の石鏃点数をスクレイパー点数で除してみた。

【グループ①のスクレイパー 1点に対する石鏃量】

- 竪穴建物D1-086
 $\text{石鏃}(3\text{点}) / \text{スクレイパー}(1\text{点}) = 3.00\text{点}$
- 竪穴建物E2-006
 $\text{石鏃}(13\text{点}) / \text{スクレイパー}(4\text{点}) = 3.25\text{点}$
- 竪穴建物E3-001
 $\text{石鏃}(13\text{点}) / \text{スクレイパー}(4\text{点}) = 3.25\text{点}$

【グループ②のスクレイパー 1点に対する石鏃量】

- 竪穴建物E4-001
 $\text{石鏃}(4\text{点}) / \text{スクレイパー}(1\text{点}) = 4.00\text{点}$
- 竪穴建物E4-008
 $\text{石鏃}(7\text{点}) / \text{スクレイパー}(2\text{点}) = 3.50\text{点}$

上記の分析の結果、グループ①・②はスクレイパー 1点に対し3.00点～4.00点の石鏃の製品があることが分かる。いずれも大きな差がなく、何らかのルールでもあるかのような近似した数量である。このような数量が活動痕跡の一

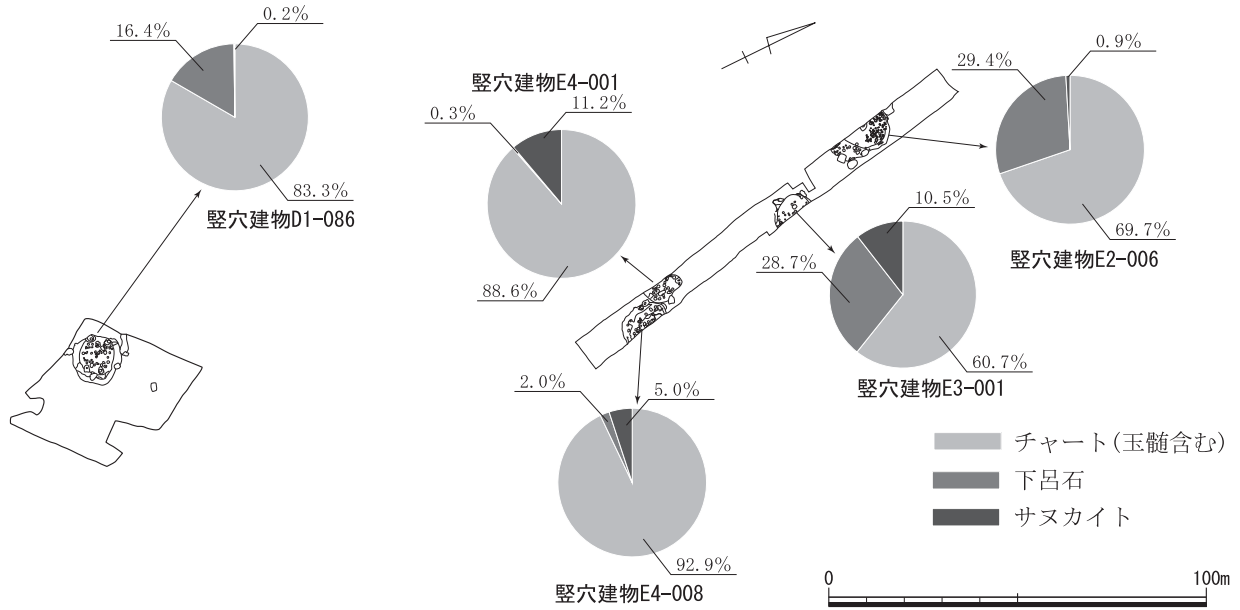
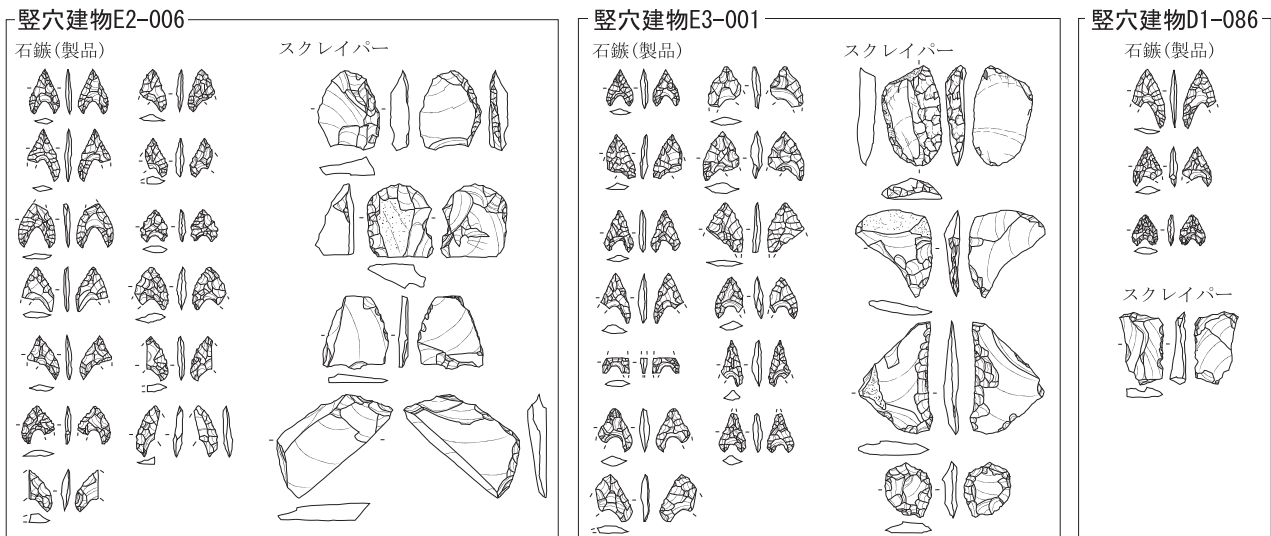


図1 縦穴建物出土剥片石器石材の重量比

グループ①の石鏃とスクレイパー



グループ②の石鏃とスクレイパー

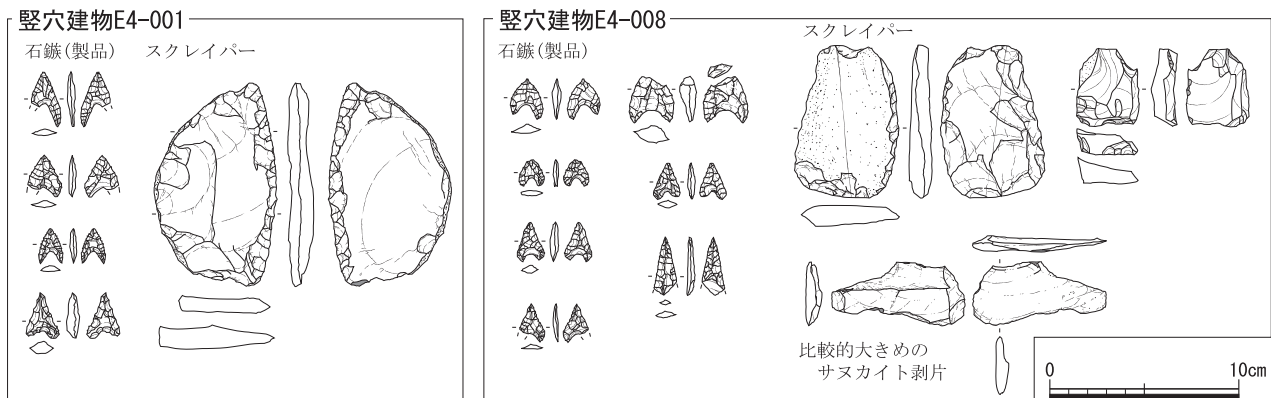


図2 縦穴建物出土の石鏃・スクレイパー

端を示しているとするれば、石鏃3～4点使う際にスクレイパー1点を用いる行動やイベントがあるのか、スクレイパー3点使う際に石鏃3～4点が必要な行動やイベントがあるなど、石鏃とスクレイパーの数量には、何らかの関連性があるのかもしれない。偶然にしては数値が近似するので、石鏃2～4点とスクレイパー1点は何らかのセット関係を示している可能性もある。例えば、このセット関係の数(スクレイパー数)がその竪穴建物での1回の活動痕跡と考えれば、竪穴建物の使用回数を想定できよう。このような想定からすると、グループ①の場合、竪穴建物E2-006はスクレイパー4点なので4回、竪穴建物E3-001はスクレイパーは4点なので4回、竪穴建物D1-086はスクレイパー1点なので1回であるが、調査では床面が2面確認できた。検出高を低く設定したことや、すべての埋土を篩いに掛けたわけではないので、数回分のセットを消失してしまった可能性もある。

グループ②の場合、竪穴建物E4-001はスクレイパー1点なので1回、竪穴建物E4-008はスクレイパー2点なので2回となる。

スクレイパー出土点数が多いグループ①の竪穴建物は床面積が広く、深度も深い。スクレイパー出土点数が少ないグループ②の竪穴建物は床面積が狭く、深度も浅い。

床面積の違いは、集団の員数にも関係するかもしれない。単純に考えれば、床面積が広ければ集団の員数が多く、狭ければ員数が少ないことになる。

深度の違いはどうか。このことは、建物建築の当初設計時に遡る。どれほどの使用頻度を想定して作られたかということである。単純に考えれば、深いほど使用頻度が多く、浅いほど使用頻度が少ないことを想定したことになる。ある程度の回帰遊動の頻度を想定して建築したことになり、収容員数と使用頻度に応じるかのように建物規模が異なっているとも解釈できそうである。

さらに、石器組成で気が付くのは、グループ②の竪穴建物E4-001・E4-008からは、大形スクレイパーが出土していることである。いずれも石材は異なり、竪穴建物E4-001の大形スクレイパーはサヌカイト製で、竪穴建物E4-008の大形スクレイパーは珪質粘板岩製である。使用石材に規範はないだろうが、大形スクレイパーを用いることに意味があるのかもしれない。石鏃形状は他の竪穴建物出土のものに似ているとはいえ、大形スクレイパーを所持していたことは他の竪穴建物よりも異質な要素であり、このような組成の違いからみてもグループ①とグループ②は異なる集団と考えられる。

5. 集団の特徴と周辺遺跡の石材の状況

5棟の竪穴建物は、石材量の割合や石器組成からみて、2つのグループに分かれることが分かった。改めて2つの

グループの特徴を整理してみよう。

グループ①

相谷熊原遺跡を特徴付ける床面積が広く、深度も深い竪穴建物を作り、チャート60～70%程度、下呂石30%程度、サヌカイト10%程度の石材量が出土した。スクレイパーが1棟につき4点以上出土した。

グループ②

グループ①の竪穴建物よりも床面積が狭く、深度も浅い竪穴建物を作り、チャート90%程度、僅かな下呂石(0.3～2.0%程度)と僅かなサヌカイト(5～11%程度)の石材量が出土した。スクレイパーが1棟につき1～2点出土し、大形スクレイパーが1点ずつ出土した。

次に近畿地方の縄文草創期の遺跡の石材量の割合についてみてみよう。

三重県・粥見井尻遺跡は竪穴建物と土偶の出土で知られる。報告書を見る限り、使用石材の大半がチャートであり、ごく少量のサヌカイトが用いられるようである(中川1997)。爪形文土器に共伴するともいわれる長脚鏃は出土していないようだ。

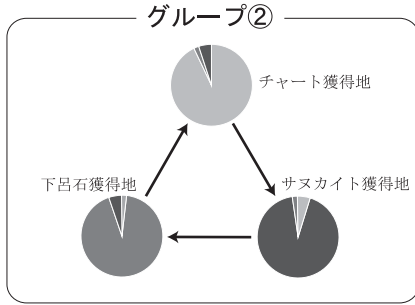
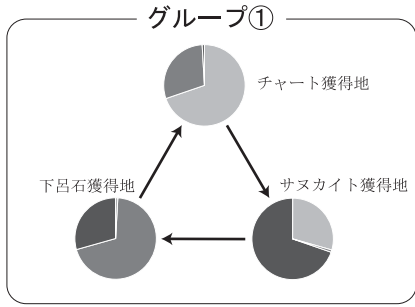
奈良県・桐山和田遺跡は、比較的原産地に近いこともあって、大半がサヌカイトである。上津大片刈遺跡などを含め、大和高原の縄文草創期遺跡群は同様の石材量割合のようである(松田2002、米川・石井2003)。なお、桐山和田遺跡・北野ウチカタピロ遺跡では、尖頭器などの大型品にチャートを用いる傾向があるとされている(田部2007)。

三重県・西江野A遺跡は、表採遺物ばかりである。石材は、チャート・下呂石・サヌカイトなど、石材構成は相谷熊原遺跡と似ているが、相谷熊原遺跡にはない黒曜石がある⁽²⁾。黒曜石は西江野A遺跡以外では、桐山和田遺跡で出土している。相谷熊原では出土していない。

西江野A遺跡の長脚鏃をはじめとした多数の石鏃は、全体的に相谷熊原よりやや小ぶりである⁽³⁾。相谷熊原遺跡と西江野A遺跡は距離は近いが、含まれる石材の違いや石鏃に技術的な違い(大きさの違い)がみえることもあって、別系統の集団と考える。胎土がよく似た土器もみられるので相互交流の可能性は否定できないが、黒曜石を有することから、同じく黒曜石を有する大和高原方面との接触の方が強いと考えている。

ところで、3種類の石材の内、量の少なさや搬入形態がチャート・下呂石と異なるサヌカイトについては疑問が残る。いずれのグループもサヌカイトの出土量は少ないが、グループ②の竪穴建物E4-001の大形スクレイパーはサヌカイト製で、自然面が外縁部に大きく残る剥片から作られている。その形状は流通形態の板上素材を思わせる大きさと形状⁽⁴⁾を呈し、サヌカイトを主体石材とする集団との接触の後、相谷熊原遺跡へ持ち込んだ可能性がある⁽⁵⁾。同じ

3 地点間遊動の場合



1 種類の石材は常に枯渇する

2 地点間遊動の場合

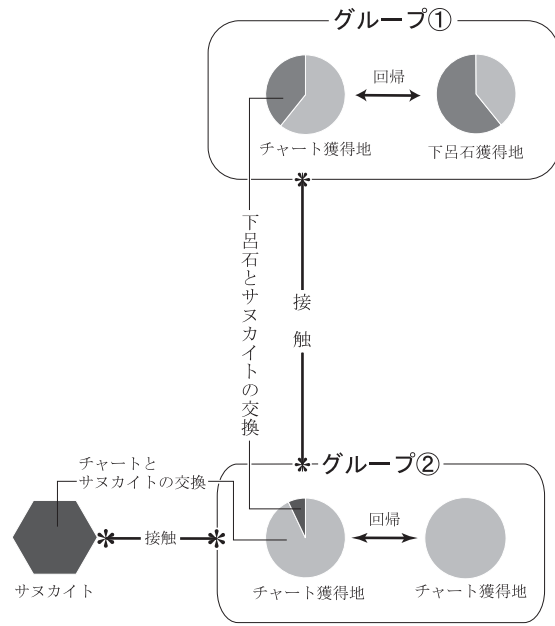


図3 集団の遊動想定モデル

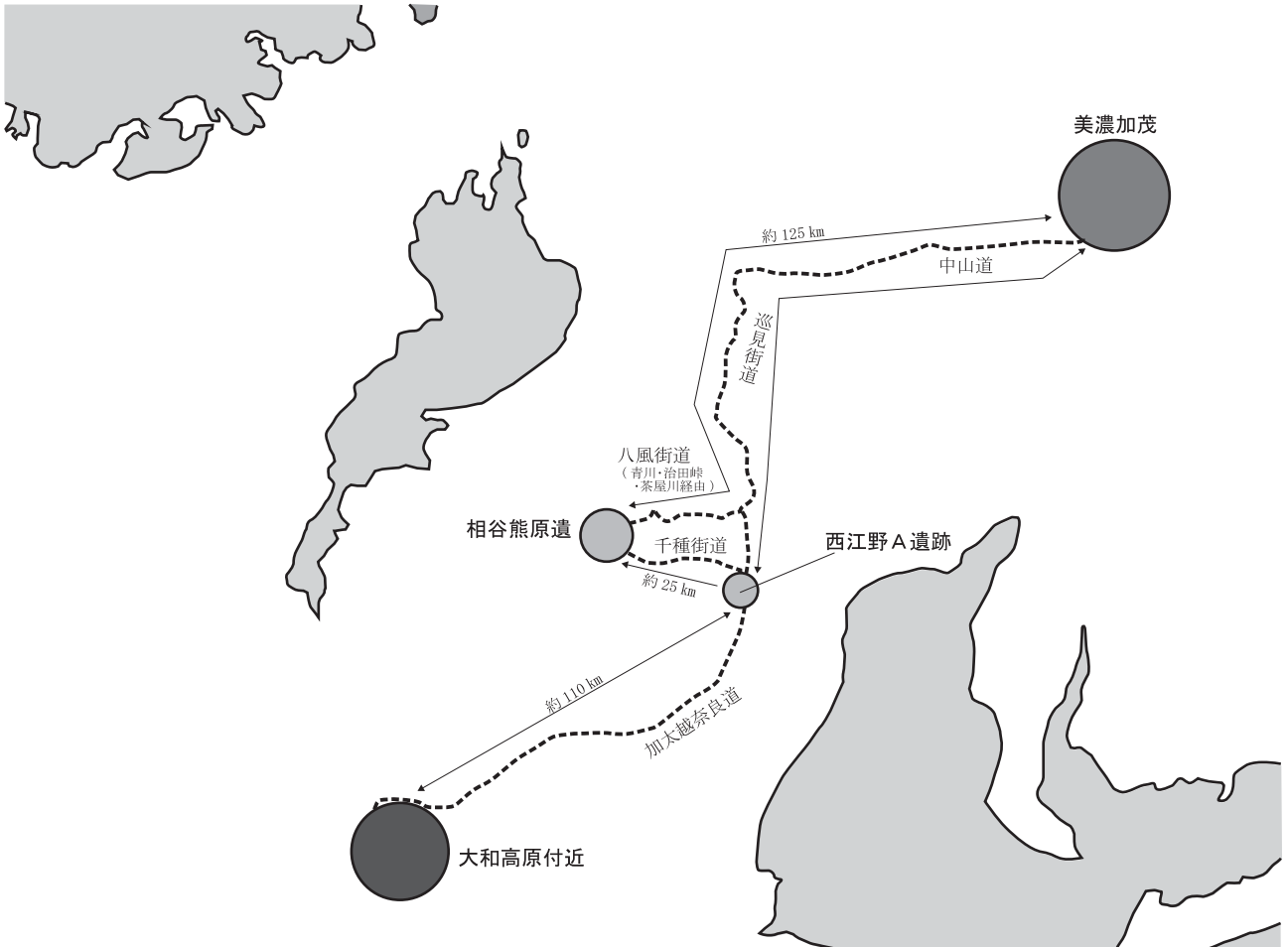


図4 遊動経路想定図

くグループ②の竪穴建物E4-008からはサヌカイト剥片が出土している。このサヌカイト剥片は、5棟の竪穴建物から出土したサヌカイトの中で大ぶりの剥片である。流通形態の姿に近い状態かもしれない。

以上のことから、グループ②は、サヌカイトを入手しやすい集団であった可能性がある。グループ②が僅かながらも下呂石を所持していたのは、グループ①との接触時に交換等によって獲得したのかもしれない。

6. 遊動モデルの想定

単純に石材量の割合に着目すれば、集団行動の中に「埋め込まれた」獲得行動で補充されて行った石材とみることもでき、グループ①とグループ②の石材量の割合の違いは、相谷熊原遺跡への到着時期の差と考えることもできよう⁽⁶⁾。その場合、チャート・下呂石・サヌカイトの獲得地間を遊動することになり、残存量から推測すればチャート→サヌカイト→下呂石の3地点間を順に獲得していくことになる。下呂石獲得地を美濃加茂市とし、サヌカイト獲得地を大和高原付近とすれば、獲得地間の距離が長いこともあって消費量が多くなるのか、相谷熊原遺跡地点においてのサヌカイト残存量が極端に少ない。距離が長い下呂石-サヌカイト間は、1種類の石材が枯渇した状態で遊動することになり、計画的な石材取得とは考え難い(図3)。

グループ①とグループ②の違いから、異なる集団の可能性が見えてきた。石材量の割合からみる限り、グループ①はチャート獲得地（相谷熊原遺跡）-下呂石獲得地（美濃加茂市付近か）間を遊動する集団であり、グループ②はチャート獲得（相谷熊原遺跡）-チャート獲得地間（地点は不明）を遊動する集団と考える。3種類の石材は、3地点間を遊動する1つの集団がもたらしたのではなく、2地点間を遊動する2つの集団の交流と交換によるものとする(図3)。グループ②のもう一つの居住地は、サヌカイトを容易に入手し易いところと思われ、大和高原付近から西江野A遺跡付近の間と考える。

7. 遊動経路の想定

縄文時代に限らず、集団の移動ルートを想定することは余程の確証ある事実がない限り難しい。人が動く限り道が存在したのは明らかであるが、遺構として見つかることは稀である。様々な研究において、道の存在が具体的に述べられることは少ないが、早期以降の西日本の縄文集落は小規模であったとある一定範囲を回帰的に遊動していたという見解がある中で、集落間を繋ぐ道の存在も想定されている(大野2011)。

縄文時代草創期の遺跡が乏しい西日本では集落間をつなぐ道の想定は難しいが、既存の広域ルート付近に遺跡が存在することは注目すべきである。既存のルートとは国道や

街道などの主要道のことである。街道は古く遡っても古代までだが、発掘調査を必要とする開発が既存のルートと重なるのか、人類が通った道が踏襲され続けて既存のルートとなったのか、偶然が重なってその場所で遺跡が形成されたのかは分からない。しかし、既存のルート付近に遺跡が形成されたというのは事実なので、まったく根拠がないとは思えない。不明な点が多いながらも、チャート・下呂石・サヌカイトを獲得し得る地域と相谷熊原遺跡とを結ぶ遊動経路の想定を試みよう(図4)。

相谷熊原遺跡は、中世の近江商人が盛んに利用した八風街道と、千種街道の合流点付近に位置する。八風街道は愛知川沿いの谷筋の、千種街道は洪川沿いの谷筋の山越えルートである。共に鈴鹿山地の峠を越え、三重県側へ通じる道である。千種街道を三重県側に抜け、やや南下すれば西江野A遺跡がある。

西江野A遺跡は千種街道の根の平峠越えのやや南側、千種街道の南側の武平峠を下ったところ、鳥井戸川と三滝川の合流点に位置する。一方、三重県側山裾には江戸時代に利用された巡見街道が南北に通じ、西江野A遺跡は巡見街道に近い位置にある。巡見街道は、大和高原方面より伸びる加太越え奈良道と近世東海道の交差点から岐阜県方面へ伸びる道である。八風街道もこの巡見街道と交差する。

草創期遺跡群がある大和高原の北側には、木津川沿いの奈良道があり、伊賀上野方面へ通じる。奈良道は柘植川沿いを北上し、亀山市で近世東海道に合流する。東海道・奈良道・巡見街道が交差する付近には、縄文時代早期初頭の大鼻遺跡がある。

下呂石獲得地とした美濃加茂市は、岐阜県下呂市方面から南下する白川街道と中山道が交差するところに位置する。中山道は木曾川・揖斐川を渡渉し、関ヶ原を越えて米原へ至る。

上記の既存ルートを経た各遺跡間の距離をみてみよう。相谷熊原遺跡-西江野A遺跡間の距離は、千種街道経由で約20kmである。大和高原-相谷熊原遺跡間は、奈良道-巡見街道-千種街道経由で約135kmあり、この経路の途中には西江野A遺跡があるのが注目される。下呂石獲得地とした美濃加茂市付近から相谷熊原遺跡までについては、鈴鹿山地西麓では縄文草創期の下呂石の出土例がないため、鈴鹿山地東麓を遊動経路と考えている。また、最短ルートを採るなら八風峠まで南下せず、大安町石樽から青川を遡り、治田峠を越えて茨川に至り、茶屋川を下って八風街道へ向かう方が合理的かもしれない。従って相谷熊原遺跡-下呂石獲得地間の距離は、中山道-巡見街道-青川峡-治田峠-茨川-八風街道経由で約125kmである。

既存ルートを経由した場合、推測した下呂石獲得地とサヌカイト獲得地の相谷熊原遺跡までの距離は、共に100km以上あることになる。図4は上記の鈴鹿山地周辺の既存ル

ートと遺跡の位置を示したものであるが、石材獲得地間の距離の間に、一時居住地や消費地、デポ地等が存在したかもしれず、このような単純な相互関係ではないだろう。

8. 今後の課題

以上、石材や石器組成から、相谷熊原遺跡の集団と鈴鹿山地を取り巻く縄文草創期の集団の動きを想定してみた。多分に不明な点が多く、東日本と比べて資料が少ないこともあって、想像の域を出ないのが現状である。それ故に事例の分析と検討は不可欠であり、事例が少ない分さらなる分析と検討を行っていく必要がある。特に、遺構と遺物の関係は重要であることはいうまでもないが、改めて意識する必要があるだろう。さらに周辺地形や既存ルートとの関連も無視できない。特に遺跡が立地することが多い谷筋の合流点には注意すべきだろう。

石器はその石材により集団の行き先や行動範囲が明らかになり、技術面を追うことによってより正確に集団の行動を追うことができる可能性をもっている。今回は石材と組成の面から集団の動きを追跡することを試みたが、今後は技術面からも集団の動きを追跡し接近していきたい。

註

- (1) 全ての竪穴建物が同条件で調査されたわけではない。竪穴建物D1-086は完掘できたが、竪穴建物D1-086以外は半分しか発掘調査を実施していない。竪穴建物D1-086は縄文草創期という遺構の認識が遅れたこともあり、検出面を低めに設定したため、上層の情報は失われている可能性がある。
- (2) 筆者の実見による。
- (3) 筆者の実見による。相谷熊原遺跡の石鏃は全長3cm程あるが、西江野A遺跡は2.5cm程であった。僅か5mm程の違いかもしれないが、形状は似ていても、プロポーシオンは異なっていた。
- (4) 縄文時代草創期の段階は板状素材として流通するが、流通範囲は狭く、大和高原や伊賀地方が中心であり、縁辺に疎らに流

通する程度である。

- (5) 原産地近くで入手し、遊動途中に加工が施され、相谷熊原遺跡において製品のかたちを成して放棄された可能性も考えられる。
- (6) 先の石材獲得地からの時間が長い程、次の石材獲得地までに石材消費量が多くなる。

文献(著者名・刊行機関名50音順、刊行年順)

- 大野 薫(2011)「縄文集落における弱定着性と回帰的居住」『季刊考古学』第114号 雄山閣
- 栗島義明(2010)「縄文草創期の石材利用と石器組成－石鏃出現期における黒曜石利用－」『移動と流通の縄文社会史』明治大学日本先史文化研究所 雄山閣
- 白石浩之(1994)「縄文時代草創期の集団構造への接近」『縄文時代』第5号 縄文時代文化研究会
- 田部剛士(2007)「サヌカイトの供給(二上山)」『縄文時代の考古学 6』同成社
- 中川明(1997)『粥見井尻遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財調査報告156)三重県埋蔵文化財センター
- 西沢寿晃・佐々木 明・徳松正廣・大参義一・宮尾嶽雄・相見 満(1984)『栃原岩陰遺跡』北相木村教育委員会
- 藤山龍造(2009)「縄文時代初頭の石材消費と移動形態」『考古学研究』第56巻2号考古学研究会
- 松田真一(2002)『桐山和田遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
- 松室孝樹・重田勉(2014)『相谷熊原遺跡 I』滋賀県教育委員会・(公財)滋賀県文化財保護協会
- 村田広司・神村透・新谷和孝・角張淳一(1995)『お宮の森裏遺跡』(一般国道上松バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書)建設省飯田国道工事事務所・上松町教育委員会・木曾郡町村会
- 米川仁一・石井香代子(2003)『上津大片刈遺跡』奈良県立橿原考古学研究所

【編集後記】

本号は、縄文時代から近代までの、埋蔵文化財やその資料管理、建造物など、文化財にかかわる日頃の研究成果の集成、論考の再評価、等となっており、幅広い時期と事物を対象とした豊富な内容となりました。

本書が、文化財の保護と調査・研究の進展のため、広く活用されることを願います。(編集担当)

平成26年（2014年）3月31日

紀 要 第 27 号

編集・発行：公益財団法人滋賀県文化財保護協会
520-2122 滋賀県大津市瀬田南大萱町 1732-2
(TEL) 077-548-9780 / (FAX)077-543-1525
e-mail: mail@shiga-bunkazai.jp
<http://www.shiga-bunkazai.jp/>

印刷・製本：マルキ印刷株式会社